
NARUTO・穢土転生スペシャル

NARUTO?LOVE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO・穢土転生スペシャル

【Nコード】

N2875T

【作者名】

NARUTO?LOVE

【あらすじ】

〜穢土転生で蘇生する忍〜

・シロ・クロ（雲）

・ネコミミずきん（リル）（木ノ葉）

・大良花菜子（木ノ葉）

・ミヤ

・陽炎丸

・猿雅丸

・草芽葉菜

- ・いろどりヨシ子（木ノ葉）
- ・雨季
- ・栗丸投（木ノ葉）
- ・当野欲人（滝）
- ・ヤギク
- ・キザ（木ノ葉）
- ・やまはマヤ
- ・花鏡杏（雲）
- ・森乃空真（木ノ葉）

蘇る13体（前書き）

バリバリ妄想です。

45巻のオリキャラを登場させてみました。

蘇る13体

〔第4次世界大戦〕

薬師カブト「そろそろ駒が減ってきた。」

うちはマダラ「なら、こいつらを使ったらいい。」

マダラの面から、左側に13人、右側に13人出てきた。

うちはマダラ「左側は、名のあつた有名な忍たちだ。殺しておいた。右側は、そこらにいた雑魚。穢土転生をするがよい。」

薬師カブト「はいはい。『穢土転生の術！』」

あたりに、叫び声が響く。

薬師カブト「完了……！！」

森乃空真「あ、あなたたち！ 暁じゃない。『幻術・外……』」

薬師カブト「くたばれ！ おまえたちは俺の支配下にある事を覚えとけ。お前たちは「特別攻撃班」。隊長は、森乃空真だ。お前たちは、単なる補充品。テキトーに会った奴らをやればいい。散れ！！！！」

13人は命令通り散った。

うちはマダラ「森乃空真か……」

薬師カブト「そんな有名なの？」

うちはマダラ「尋問を専門とする一族『森乃一族』の忍だ……
薬師カブト「楽しみだな。」

戦闘開始・・・！

森乃空真「畜生、体が勝手に動く。」

森乃たちは、木と木の間を飛びながら移動していた。

キザ「おい！おまえ滝隠れの当野じゃねえか。俺から、木ノ葉の額当てを殺して奪った」

当野欲人「！」

（・・・）回想（・・・）

キザ「何だよ、三代目火影！上忍の俺に滝隠れに送ってほしいものがある。だって？ふざけんじゃねーよ。俺は宅急便じゃないっつーの。」

三代目火影「何だと、お前は木ノ葉の忍として失格だ。額当てを没収する。」

キザ「ええええええ！三代目火影さま。何てねお前誰だ。」

三代目火影「よくわかったな。解！」

当野欲人「俺は、額当てヲタ。お前の額当てをうばってやる。」

キザ「やるつきゃないみたいだな。火遁・炎連弾！！」

当野欲人「水遁・方角くの術」

キザ「チクシヨ―、火遁・炎・・・」

当野欲人「水遁・水牢の術！」

キザ「ブクツ（チクシヨ―）」

当野欲人「頂くぜ！」

）．．．）．．．）．．．）．．．）．．．）．．．）

キザ「俺は溺死した・・・って、死んだのか俺？」

ヤギク「空気を読め、ウチも一回死んだ。」

森乃空真「ただの殺戮人形ってことか。」

陽炎丸「！、9時の方向に気が集まっている、おそらく、戦闘しているのだろう。行こう！！」

やまはマヤ「私が奇襲する。『弓術・起爆弓矢』」
トランシッポウ

弓についていた起爆札が爆発した。

忍連合軍の忍「うわああああ。」

ダルイ「ま、また穢土転生？って、杏さま？」

花鏡杏「お前は・・・ダルイ？」

秋道チヨウザ「キザさん！」

キザ「チヨウザ？」

13人「！」

ダルイ「杏さまが何故……」

花鏡杏「『チューリップ体術・宙律譜』」

ダルイ「うつ……」

テンテン「ダルイさん！応援を頼まなきゃダメね……」

ヤギクVS・・・「1」

日向イロハ「あなたは・・・湯隠れ、術喰いのヤギク!!」

ヤギク「だから?」

日向イロハ「『風遁・豪空砲』!!」

ヤギク「だから?」

日向イロハ「術を喰った?」

ヤギク「だから?」

日向イロハ「『白眼』!、風遁のチャクラがヤギクの体内にある。」

ヤギク「風遁・神嵐」

日向イロハ「ぐふあっ!チクシヨ、誰かああ!」

チヨウザ「こつちもダメだ。スマン」

日向イロハ「俺がやるしかないみたいだな・・・」

ヤギク「だから?」

日向イロハ「五大性質じゃないものなら・・・八卦掌回転!」

日向イロハ（よし）

ヤギク「だから？」

日向イロハ「く、喰いとめた？チクシヨー……ダメだ。」

ヤギクVS・・・「1」(後書き)

術喰いのヤギクに苦戦するイロハ。この先如何に。「2」に続く。

ヤギクVS・・・「2」(前書き)

術喰いのヤギクに苦戦するイロハ

ヤギクVS・・・「2」

日向イロハ（術を喰いとめるその能力の原理を見つけなければなら
ない、ならばどうなるか試してみよう。）「『火遁・百花繚乱』」

ヤギク「だから？」

日向イロハ（よし）「『白眼』！」（やはり、火のチャクラがある。
次来るぞ）

ヤギク「『火遁・火走り』」

日向イロハ（よし）「『風遁・豪空砲』！」

ヤギク「だから？」

日向イロハ（とにかく五大性質はダメみたいだ・・・）「八卦掌回
天！」

ヤギク「だから？」

日向イロハ（よし）「『白眼』！」（五大性質じゃない術だとヤギ
クの中にチャクラは無い！術じゃなければいいのか？でも術じゃな
いって）

隣では、テンテンとマヤが戦って言った。

テンテン「操具・天鎖災！！」

やまはマヤ「ぐっ！」

日向イロハ（そうだ、操具……でも……忍具と言ったら手裏剣とクナイしか……いや、むしろそれ位しか対抗するスベは無い！でも、相手もそうバカじゃない、手裏剣くらいならよけられる……）

ヤギクVS・・・「2」(後書き)

相手の弱点を知ったイロハ。でも、強いヤギク。イロハは悩む
「3に続く」

ヤギクVS・・・「3」(前書き)

相手の弱点を知ったイロハ。でも、強いヤギク。イロハは悩む

ヤギクVS・・・「3」

日向イロハ（どうしよう・・・？絶対条件は相手をよけさせないこと。そうだ！クナイに紐を通し、起爆札を付け、相手の周囲に何か仕掛けて逃げさせないようにする。そして、手裏剣を風遁で強化する！さらに、火遁の術で。あとは、日向の封印術で・・・よし、やるう！）

“シュツ”と紐を通した起爆札付クナイを仕掛けた。

ヤギク「だから？」

“シュツ”と手裏剣を投げた。

ヤギク「だから？」

日向イロハ「風遁・烈風掌！そして、火遁・百花繚乱」

ヤギク「だか・・・！キャーーーーー！」

ヤギクは猛火の手裏剣に吞まれた。

日向イロハ（よし、いまだ！）「八卦式封印！」

ヤギク「ギャーーーーー！」

ヤギクは封印された。

日向イロハ「フー。つか……」

日向イロハは八卦式封印の大幅なチャクラ消費によって失神してしまっただ。

【あと12人】

リル&花菜子VS・・・「1」

コノキ「チクシヨー、キリがねえぜ。な、ナンノキ？」

ナンノキ「そうだけ、兄貴。」

コノキ「もういい。」

コノキは自分の体にクナイを刺した。

ナンノキ「兄貴イイイイ！何てな、『解』！」

リル「良くわかったわね、坊や。」

コノキ「お前誰だよ？」

リル「私は『ネコみみずきん』よ？」

大良花菜子「あれ？リルじゃなかったっけ？」

リル「うるっさいわね。私は『ネコみみずきん』よ！」

ナンノキ「何だよ、二匹もいるのか。」

大良花菜子「あれ？人間は〇人って数えるんじゃないかなかったっけ？私は『大良花菜子』です。」

ナンノキ（空気の読めないヤツ・・・）「兄貴、やるか？」

大良花菜子「やるつて、闘いですか？キヤー――怖い、隠れなきや。『スーパ―隠れの術』」

コノキ「消えた……？ま、いいやあのぶりっ子からやるつ。」

リル「『ぶりっ子』？うるっさいわね。おとなしくしなさい、坊や。今、葬つてあげるから。『幻術・黒暗光』」

コノキとナンノキの周りは暗闇に包まれた。

ナンノキ「うぜえ、見えね。『雷遁・雷の宴』」

コノキ「＋||) ^ ¥ @ ? ? ー。ちよ、ナンノキ。俺に当たってるぞ。音を見てはんだ……くはっ！」

リル「ケハハハハ。ああ、血が出てる。ケハハハハ。」

ナンノキ「兄貴？おい、ぶり……くはっ」

リル「私を怒らせたもん。あたりまえじゃない。ケハハハハ。」

リル&花菜子VS・・・「1」（後書き）

謎の女性「大良花菜子」。幻術使いの「リ・・・」ネコみみずき
ん。「ネコみみずきん」の幻術にコノキとナンノキは勝てるのか
。

リル&花菜子VS・・・「2」(前書き)

謎の女性「大良花菜子」。幻術使いの「リ・・・」ネコみみずき
ん。「ネコみみずきん」の幻術にコノキとナンノキは勝てるのか
。

リル&花菜子VS・・・「2」

リル「ケハハハハ。」

コノキ「音を聴け、ナンノキ！」

ナンノキ「音・・・」（集中しろ、自分。）

>タッタッタ<

ナンノキ「そこか、『雷遁・雷の宴』！」

リル「うっ！」

幻術が解け、暗闇が消えた。

コノキ「ナイス！ナンノキ。」

ナンノキ「よし、一匹。」

大良花菜子「あああ、リルさん！『医療術・チャクラ送信』！」

リル「サンキユ、花菜ちゃん。」

ナンノキ「何だよ、復活したぞ。」

大良花菜子「えっ、私は『花菜子』ですけど。」

リル「うるっさいわね。空気読みなさいよ」

コノキ「これを繰り返すつもりか。おい、俺は幻術つかいやるから、ナンノキは空気読めないヤツをやれ。」

大良花菜子「えっ、私は『花菜子』で……え〜！私嫌だ〜〜。『スーパー隠……』」

ナンノキ「『雷遁・雷の宴』！」

大良花菜子「　　？÷　　！た、助けて。」

リル「花菜ちゃん！」

大良花菜子「わ、わたしは、『か、かなこ』っでs」

リル&花菜子VS・・・「2」(後書き)

花菜子の能力はチャクラを送る事ができるという事だ。コノキとナ
ンノキは分担して戦うことにしたが 「3」に続
く

リル&花菜子VS・・・「3」(前書き)

花菜子の能力はチャクラを送る事ができるという事だ。コノキとナ
ンノキは分担して戦うことにしたが

リル&花菜子VS・・・[3]

大良花菜子「ちょちょ、もうちょっと穏やかにいきましょっよ・・・
・ね・・・」

ナンノキ「そうはいかねんだよな。『雷遁・雷球』!」

大良花菜子「ブギヤツ!!どうしよう」

ナンノキ(対して強い術は持ってないらしいな。)
「なら、『雷と・・・』」

大良花菜子「『口寄せ・タロウ』!」

ナンノキ(口寄せ?!)

タロウ「ワン!」

ナンノキ「いのしし?」

大良花菜子「というか、イノシシって『ワン』って言わないでしょ、
どう考えてもイヌでしょ。」

ナンノキ「うるさい『雷と・・・』」

大良花菜子「ああ、タロちゃんは起こると強烈です。『タロちゃん、
ダメだよ。』」

腕にかみついてきたタロウ

ナンノキ「何だよ、いのしし……」

タロウ「ワワン・ワツワワワワン！（土遁・固化の術）」

大良花菜子「固化の術？ダメでしょタロちゃん」

ナンノキ「犬としゃべれるんかい？って固化？っておい！う、腕が……」

大良花菜子「ごめんなさい。固化が進むと大変なので切りますね。」

クナイで大良花菜子はナンノキの固化した腕を切断した。

大良花菜子「ああ、余分なところまで切っちゃいました。ごめんなさい。」

ナンノキ「おい！何し……」

タロウ「ワワン・ワワワワワワワン（土遁・土竜隠れの術）！」

ナンノキ「逃がさない！『雷遁・雷の宴』」

タロウ「ワオ〜ン！」

大良花菜子「ああ、タロちゃん！『医療術・チャクラ送信』」

ナンノキ「ちくしょー、無限回復……回復？なら、完全に息の根を止めればいいのか？」

リル&花菜子VS・・・「3」(後書き)

花菜子の口寄せの土遁を使うイヌのタロウ。だが、花菜子の無限回の復の弱点が解ったようだ
「4」
に続く

リル&花菜子VS・・・「4」(前書き)

花菜子の口寄せの土遁を使うイヌのタロウ。だが、花菜子の無限回復の弱点が解ったようだ

リル&花菜子VS・・・「4」

ナンノキ「おい、おいでイノシシ！」

タロウ「ワワワワワワン！（いのしじじゃないよ）ワワワワン
（こんにゃろ〜）」

駆けてくるタロウ・

ナンノキ（今だ！）「『雷遁・雷縛り』」

タロウ「ワ〜ン（あ〜）」

ナンノキ（ごめんなイノシシ）「『雷遁・偽暗』」

タロウ「ワオ〜・・・」

大良花菜子「タロちゃん！もう、いいわ。『スーパー隠れの術』」

ナンノキ「またか・・・」

大良花菜子「キャッ」

タロウの死体でこけた。

ナンノキ「ま、まさか見えない速さで走ってたってこと？」

大良花菜子「バレた。」

ナンノキ「『雷遁・雷縛り』」

大良花菜子「きゃっ！」

ナンノキ「『雷遁・偽暗』！」

大良花菜子「ブギヤ」

ナンノキ「よし、この封印札を貼って……よし」

リル&花菜子VS・・・「4」(後書き)

花菜子を封じたナンノキ。一方、リルとコノキは
「5」に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2875t/>

NARUTO・穢土転生スペシャル

2011年6月24日12時54分発行